

照応における“这”と「ソ」の無標について

龐 黔 林

On the Unmarked Natures of “zhe” and “so”

PANG Qianlin

要 旨

指示詞の照応用法に関して、中国語の“这”も日本語の「ソ」も使用頻度において他の指示詞より高いところから、無標だと言われている。本文はコーパスの考察と用例分析に基づき、両者の無標の性格に注目した。“这”の照応用法は直示用法の拡張で、特に距離感などを表す必要のない時に使われる傾向がある。それに対し、「ソ」の照応用法は直示用法と性格が異なるものであり、指示対象にテキストの意味を付与するという機能が発達していると言える。最後に対訳のデータにより結論を裏付けた。

キーワード：指示詞、無標、照応、直示

Abstract

On anaphora of Chinese and Japanese demonstratives, “zhe” and “so” have higher use frequencies relative to other demonstratives, and are thus considered to be unmarked. Based on the investigation and analysis of data and examples from the corpus, this paper identifies their differences in terms of their respective unmarked nature, i.e. the anaphora of “zhe” is the expansion of its respective deixis, and its use is default if it is not necessary to express a particular sense of distance; the anaphora of “so” is its original usage, and it has a strong function which can implant the aforementioned meaning into the referential object. Finally, the argument is verified by comparing the translation equivalence.

Keywords: demonstrative, unmarked, anaphora, deixis

1 はじめに

中国語の指示詞は“这/那”の二系列を、日本語の指示詞は「コ/ソ/ア」の三系列を成しており、両者は直示においても照応においても複雑な対応関係が見られる。そのため、指示詞は第二言語習得の難点の一つであり、習得研究の焦点でもある。

迫田（1996）は日本語学習者が指示詞「コ/ソ/ア」の習得過程に現れた誤用について分析を行った結果、「母語の違いが影響しているのはコ系文脈エラーの消滅順序であり、韓国語話者では最も早く消滅し、中国語話者では調査期間の最後まで消滅しなかった」ことが分かったと述べている。「コ系文脈エラー」というのは次のような誤用の場合を指している。

（1） A：[高校の友達が] 薬をたくさん飲んで死にました。

B：[大学受験で] 落ちたから？

A：*これ（それ）じゃなくて、勉強がたいへんですから。（迫田 1996）

つまり、中国語を母語とする日本語学習者では、例（1）のような「ソ」を使用すべきところに、「コ」を使用した誤用が調査期間の最後（学習歴35～36ヵ月）まで消滅しなかったということである。その原因について、迫田（1997）は木村（1992）の見方を援用し、「中国語の対話においては、対話相手が導入した内容であっても、聞き手の縄張り内のことがらという認識で捉えずに、『われわれ』の領域内のものとして捉えることが一般的であり、そのために『这』系で指示される」と説明している。

迫田（1997）の解釈は従来の指示詞研究に基づいたものだと考えられる。従来の研究では、「ソ」は直示において、聞き手または聞き手の領域に属するものを指すと見なされ、照応用法についてもそのような説で解釈されるものが多い。さらに、他言語の指示詞用法を説明する際にも同じ理論で捉えようとしているのである。

中日指示詞の対照研究は、近年盛んになされてきたと言える。従来の研究に基づいた直示用法を対照するもの（単娜 2011）のほかに、照応用法を対象にしたものも少なくない（史雋 2008, 胡俊 2010など）。これらの研究は中日指示詞の対応関係とそれぞれの特性に注目するものが多い。

しかし、対照研究は言語間の特殊性だけでなく、言語の普遍性に注目して答えを求めることもできると思う。普遍性からいうと、指示詞の照応用法において、無標と有標があり、“这”と「ソ」は無標だと言われている（沈家煊 1999, 曹秀玲 2000, 吉本 1986, 金水 1999など）。これは照応用法の場合、“这”と「ソ」が使用頻度において他の指示詞より高いためだと考えられる。ところが、無標といっても“这”と「ソ」は性質が同じものだろうか。この問題については、管見の限りまだ議論されておらず、十分検討する余地があると思う。本文は指示詞の無標に注目し、“这”と「ソ」の照応用法の性格を考察した上で、中日指示詞の照応用法にお

ける根本的な差異について考えてみたい。

2 “这”と「ソ」の使用頻度について

有標性理論（markedness theory）は、同じカテゴリーを成す言語項目の間が対比関係を保持しない現象に関する理論である。有標性は、個別言語内の現象としてだけでなく、言語間における普遍的現象としても認められる。有標と無標を区別するには、様々な基準が用いられ、また、有標・無標は程度の違いという相対的なものである。指示詞の有標・無標について考える場合、他の基準（例えば、形式や下位区分など）においてあまり差異が見られないため、頻度基準は決定要因になると思われる。以下、まず中日指示詞の使用頻度について考察してみる。

筆者は小型コーパスを作成し、“这/那”と「コ/ソ」の照応用法について調べてみた¹⁾。コーパスは《中日対訳コーパス》を基盤に、中日作家それぞれ17人の作品を1部ずつ、合わせて34部の作品を選んで作成した。そのうち、小説はそれぞれ10部、伝記や論説文はそれぞれ7部あり、日本語の文章は15000文字、中国語は10000文字前後を取り出しタグをつけた。結果は表1と表2で示される。

表1で分かるように、中国語の17の文章では、“这/那”の照応用法は合計1631例あり、そのうち“这”は1196例で、全体の73.3%を占めている。それに対し、日本語の17の文章では、「コ/ソ」の照応用法は合計2209例あり、そのうち「ソ」は1519例で、全体の68.8%を占めている。つまり、“这”と「ソ」は使用頻度において“那”、「コ」と比べて明らかに多いことが分かる。これは“这”と「ソ」が無標だと考えられる理由だと思われる。

では、照応に用いられる場合、なぜ中国語において近称の“这”が無標であるのに対し、日本語ではいわゆる中称の「ソ」が無標なのであろうか。以下では“这”と「ソ」の無標性について分析し、その原因も探ってみる。

表1 “这/那”の照応用法における使用頻度

这	那	合計
1196 (73.3%)	435 (26.7%)	1631 (100%)

表2 「コ/ソ」の照応用法における使用頻度

コ	ソ	合計
690 (31.2%)	1519 (68.8%)	2209 (100%)

1) 「ア」は文章中の用法を「想起」と考え、考察対象外とする。

3 “这”の無標について

“这/那”の非対称、つまり“这”は“那”より多用されているということについて、曹秀玲(2000)は次のように認知的な面から解釈している。

人类认知的这种以自我为中心的特点，决定了近指的“这”在心理上的可及性高于远指的“那”。前者在信息处理中最容易储存和提取，在形成概念时最容易接近人的期待和预料，因此，用它来复指前文，会增强语篇的连贯性，使前后语段的语义紧密衔接；用它来指称事物，描摹时间、空间、程度等，会使听话人具有身临其境的感觉。

(人間には認知の自我中心という特徴があるため、近称の“这”の心理上における接近可能性が遠称の“那”より高いことは考えられる。“这”は情報処理の際、貯蓄も引き出しも易しいし、概念形成の際にも人間の期待と予想に近づく。従って、“这”によって先行文脈を指す場合、テキストの結束性が強まり、文脈の語義の緊密性が保たれる。そして、物、時間、空間、程度などを指す場合は、生き生きとした叙述を与える。) (筆者訳)

この解釈は「指示システムの自己中心原理」という認知的理論に基づいたものと言える。

直示における近称の多用は人間の基本的な認知能力によるものであり、言語の普遍性でもある。話し手はいつも自分を中心に話を進めており、自分が居る場所や、自分に近い物、自分と関わりの強いものなどみな近称で指すのである。中国語の“这/那”も例外ではない。話し手に近いものは“这”、遠いものは“那”で指し示される。照応用法に関する曹秀玲(2000)の解釈では、人間の記憶特徴と語用的立場から“这”の照応用法は直示用法の拡張だということが窺える。

“这”の無標について、他の角度からの解釈も考えられる。遠称としての“那”は常に指示距離の遠い指示対象を指し示すのに用いられるが、この指示距離は物理距離だけでなく、心理距離も含まれている。文章では、常に心理的な疎遠を表すより、平然とした態度で話を進めるのが普通である。このような心理的距離の疎遠を表す必要のない場合は、“这”の使用が一般的だと思われる。例えば、

- (2) 道静高小毕业考上了北平西郊的南山女子中学之后，母亲对她的态度有了显著的好转。因为这时①她已经长成了一个顾长、俊美的少女。她的脸庞是椭圆的、白皙的、晶莹得好像透明的玉石。眉毛很长、很黑，浓秀地渗入了鬓角。而最漂亮的还是她那双忧郁的嫣然动人的眼睛。她从小不爱讲话，不爱笑，孤独，不爱理人。可是徐凤英并不注意这些②，她注意的是这女孩子③的相貌的变化，和如何使她具有一定的学历，因为这④是那个时代的时髦妇女要嫁一个有钱有势的丈夫所必备的条件。

(《青春之歌》)

例(2)の四つの“这”の中、③の“这女孩子”を除き、他の三つは“那”に言い換えられる

が、①は“那”で示されると時間的距離感が生じ、②と④は“那”を用いると主題に心理的距離が感じられることになる。これはこの小説の平然とした述べ方と乖離があり、また主人公の“道静”が常に話題中心に置かれるテキストの特徴にも相応しくないため、“这”の使用が選択されたのだと思われる。そして“道静”がこの文章の主人公であるため、③の“这女孩子”で示され、焦点に位置付けられるのは当然のことである。

要するに、いわゆる“这”の無標とは、特に距離感を持たない照応の場合、“这”の使用が義務的だということである。それに対し、“那”は常に指示対象への距離感を表すのに使用されるのである。例えば、

- (3) 他想起了他在自己的祖国，在辽阔高原、荒凉戈壁、长河落日、大漠孤烟的环境里的旅行。那是乘着大卡车，他站在敞篷车槽里，迎面吹来的风强劲而又自由。

（《活动变人形》）

- (4) 在我们那儿，不少老婆儿连汽车也没见过。更别说火车。清平湾不通汽车，要看汽车得翻两架大山到几十里外的小镇上去，那些老婆儿们的三寸金莲又走不动。套上驴车专程去看一回吧，她们又觉得那太近奢侈和浪费。

（《插队的故事》）

- (5) 我又想起我的一个朋友，（中略）带着老婆到他当年插队的地方去旅行结婚，据说火车一过娘子关这小子就再没说过话，离他呆过的村子越近他的脸色越青。进了村子碰见第一个人，一瞧认得，这小子胡子拉茬的二话没说先咧开大嘴哭了。我想很多插过队的人都能理解，不过为什么哭大约没人能说清。不过我想我最好别那样。

（《插队的故事》）

例（3）～（5）の“那”はそれぞれ書き手（または動作主）の指示対象に対する距離感（空間・時間・心理的距離）を表している。例（3）のように、具体的な時間・空間的距離を指示する場合、“这”が話題で述べられているイマ、ココを指すのに対し、“那”は過去、未来、遠方を指すのが一般的である。抽象事物を指示する場合、指示詞の使用は常に心理的距離を表すことが多く、例（4）、（5）のように、話し手は当該事物に対し、否定・消極的態度を持つならば、心理的疎遠を感じ、“那”を選択して指し示しているのである。

直示において、“这/那”の使用は主に話し手の空間距離に対する遠近の認識を表しており、“这”は“那”より多用され、無標だと言われている。これは、「指示システムの自己中心原理」という認知的理論に基づいたものだと言える。照応における“这”の無標と“那”の有標は直示にみられる本質の表れであり、中国語指示詞の照応用法が直示の拡張であることを示していると思われる。

4 「ソ」の無標について

2で述べたように、照応用法において、日本語指示詞は「ソ」の出現頻度が「コ」よりはるかに多い。近称の「コ」ではなく、いわゆる中称の「ソ」の多用は前文で述べた「指示システムの自己中心原理」に反する現象であると言える。「コ/ソ」の照応用法を明らかにするために、

以下は指示詞の指示対象を具体事物と抽象事物に分けて考察してみる。

4-1 具体事物と抽象事物

具体事物の照応とは指示対象が人・物・時間・場所である場合の照応で、抽象事物の照応とは指示対象が文、節、抽象名詞、動詞など直接感知できないものである場合の照応である。指示対象をこのような分類で考察する理由は以下の通りである。

具体事物は大抵五感で感じられるもの、或いは直示で指示できるものである。例えば、時間と場所については、「今、この時間」、「ここ」などと言って、話し手が話をする時の時間と場所を指示することができる。具体事物の照応の場合、指示対象への同定は主にテキストで提供された情報、またこの情報に関する受け手の記憶（長期記憶か短期記憶か）に基づいて行われるものである。そして、指示対象は大抵名詞句で表されるものであり、節や文で表されるものではない。この場合、照応の理解は意味、語用、推論、顕著性、認知などの原理と深く関わっていると言える。

抽象事物は直接五感で感じることでできない命題、事件、事実、抽象的概念などを表すものである。指示詞の指示対象が抽象事物である場合、名詞句だけでなく、節や文、更に、段落で表されることもある。抽象事物への同定は意味、語用、推論、顕著性、認知などの原理の外に、文やテキストの構造の理解に最も深く関連している。

従って、指示対象が具体事物か抽象事物かということによって現れた違いも指示詞の照応の特徴を表していると考えられる。

コーパスによる統計は表3のとおりである。

4-2 「コ」の照応用法の一特徴

表3で分かるように、「コ」の照応用法のうち、具体事物を指示するものは42.5%を占めているのに対し、抽象事物への指示は57.5%であり、後者はかなり高い割合を占めている。これは「コ」はテキストの結束性において重要な役割を果たしていることを示していると思われる。なぜ、「コ」は抽象事物への指示の割合が具体事物より高いのだろうか。これは「コ」の照応用法のある特徴と深く関わっていると思う。

コーパスのデータを詳しく分析した結果、一つ面白い現象に気づいた。それは会話文における「コ」の照応用法についてである。「コ」の会話文における18の用例はいずれも抽象事物を

表3 「コ/ソ」の照応用法における出現頻度（具体事物と抽象事物において）

	コ	ソ	合計
具体事物	293 (42.5%)	766 (50.4%)	1059 (47.9%)
抽象事物	397 (57.5%)	753 (49.6%)	1150 (52.1%)
合計	690 (100%)	1519 (100%)	2209 (100%)

$\chi^2=12.06$ (1%水準で有意)

指示するものであり、具体事物を指示するものは見当たらなかった。もちろん、そういう用法を「コ」が持っていないというわけではなく、ただ具体事物を指示する照応用法は比較的に少ない、あるいは具体事物への指示において一定の制限があるということを表しているのではないかと思う。次の表4は会話文における「コ」の指示対象の違いから見られる出現頻度を表すものである（「ソ」の用法も参考に入れておく）。

表4 会話文における「コ/ソ」の指示対象の違いに見られる出現頻度

	物	人	場所	時間	節か文	動詞	抽象名詞	合計
コ	0	0	0	0	11	3	4	18
ソ	13	13	8	6	85	6	14	145

この現象から「コ」の照応用法におけるある特徴が見出されと考えられる。1で触れたように、日本語では対話相手が導入した要素は「ソ」で示されるのが普通である。ところが、例外もある。例えば、

- (6) A：……以上で、ファッション・シティ・プロジェクトの概要の説明を終わります。
 B：このプロジェクトは、いつから開始するのかね。 (金水 1999)

金水 (1999) は例 (6) について、相手が導入した要素であっても、対象について自分自身の主題でもあると捉えることができれば、「コ」の使用は可能であろうと指摘している。金水 (1999) は更に次の例を挙げて、「コ」の照応用法の性格を説明している。

- (7) 今から、お話しを作ります。主人公は医者にしましょう。名前を仮に、田中さんとし
ます。この男はとても腕のいい心臓外科医です。 (金水 1999)

「この男」は架空の対象で、「ソ」で示されるのが普通であるが、例 (7) では「コ」で指示されている。このような場合、対象は指差すように外在的なものとして取り扱われている。これはペガサスの絵を指しながら「このペガサス」と称する現象と似ているということである。

金水 (1999) の分析をまとめると、「コ」の具体事物を指示する照応用法はその直示用法の拡張で、その事物があたかも話し手の傍にあるかのように感じられるものであるということが言える。このような性格は表4に見られる会話文における「コ」の具体事物照応用法の少なさをもたらす原因であると思われる。つまり、会話文では、「コ」は直示に多用されるが、具体事物の照応用法になると、「コ」は当該事物があたかも話し手の傍にあるかのような印象を与えがちである。コミュニケーションを行う際、話し手は常に聞き手の存在を意識しているので、先行文脈に現れた事物をあたかも自分の傍にあるかのような聞き手の認知を無視する話し方は普通避けられるのである。例えば、

(8) それから数日たって、孵化場の若主人は青子を入れたタンクと酸素のポンペをトラックに載せて来た。(中略) 庄吉さんは前々から云っていたように、イタチ除けの鮑の殻をぶら下げた竹の棒を持って来て池のほとりに立てた。

「ああ、鮑の殻。懐しいものなんでしょうね、鮑の殻。この辺のお年寄の人は、たいていこれに郷愁を持ってらっしゃいますね」

若主人は鯉の稚魚を掬いとる手を休めてそう云った。 (『黒い雨』)

例(8)の「これ」は一見、照応用法で先行文脈に現れた「鮑の殻」を指しているように見えるが、実は若主人は近くにいる庄吉さんがぶら下げた鮑の殻を指示して言っているのである。会話の現場にある事物を指しているので、例(8)の「コ」は直示用法と見做すべきである。

従って、直示的な性格がはっきり見られる「コ」の具体事物照応用法は会話文における使用頻度が少ないのである。地の文と叙述文の場合でも、この特徴に影響され、「コ」の具体事物照応用法は抽象事物用法より少ない。

「コ」の照応用法における以上の性格は抽象事物を指し示す際にも見られる。先行文脈で述べた表現や内容をいわば引用のようにとらえ、それを一括りにして指示するのである。例えば、

(9) 「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」{これ／それ}は、『学問のすすめ』の冒頭の言葉である。 (馬場 2006: 19)

馬場(2006)では、(9)のような「コ」について、「コ系の言述直示性」と呼び、「その際、先行テキストを目の前にして、指示しているかのような印象を与える」と述べている。

要するに、日本語指示詞の照応用法における「コ」の有標はその直示的な性格によるものだと言える。指示事物をあたかも目の前にあるかのように指し示す効果があるので、「コ」の使用が制限されているのである。

4-3 「ソ」の照応用法の特徴

表3を見て分かるように、「ソ」の具体事物を指示する用例の割合は50.4%で、抽象事物の49.6%とあまり差がない。テキストの結束性において、「ソ」は具体事物を指示する機能と抽象事物を指示する機能が両方とも発達していると言える。

金水(1999)は「ソはコ・アとは異なって、本質的に直示の性格が認められない」と主張し、「ソの非直示用法は直示とは全く異なる性質を持っている」と述べている。また、指示詞の発展について次のようなことを指摘している。

古代語のコ系指示詞は現代語とほとんど違いがないが、中称(ソ、シ、サ、シカ等を含める)及び遠称(カ、ア)の分布は現代語と異なる。要点をまとめると次の通りである。

- a. 中称は現代語と同様に文脈照応によく用いられ、分配的解釈も見られる一方で、文脈照応と独立した純然たる直示用法は中世末まで見られない。

(略)

上記の特徴から考えると、日本語の中称とはもともと、直接的に、今ここで知覚に捉えられない対象を指し示す指示詞であったと捉えることができる。(金水 1999)

この中で特に注目すべきところは a. の指摘である。つまり、「ソ」を含める中称は古くから直示の中称として用いられてきたわけではない。文章における「ソ」の多用は「ソ」がもともと照応用法に用いられてきたためであろう。

「ソ」の照応用法が直示の性格で解釈できないのもそのためだと思われる。「ソ」の直示用法の特徴は指示対象が聞き手領域内のものということであり、照応用法について直示の拡張だと解釈するのは難しい。これは会話文における「ソ」の具体事物照応用法を分析したら分かる。例えば、

- (10) 「俺に最初の子供が生まれた時には、不思議な感情だったな」と管理人がいった。「毎日死んだ人間を、何十人も見廻って歩いたり、新しいのを収容したりするのが俺の仕事だ。その俺が新しい人間を一人生むというのは不思議だな、むだなことをしているような気持だった。俺は死体をいつだって見ているのだから、いろんな事のむださが、はっきり分ってね。子供が病気になっても医者にはかけなかった。ところが子供は頑丈に育つ。そして、その子供が又、子供を生むとなると、俺は時どき、どうしていいかわからないな」
(『死者の奢り』)

例 (10) の「その俺」、「その子供」は人を指す具体事物照応用法であり、話し手の先行文脈に現れた人物を指し示している。この用法では聞き手の縄張りとか、中称などのいわゆる「ソ」の直示的特徴は感じられない。

庵 (2007) は「その」の機能について、「定情報名詞句へのテキスト的意味の付与が義務的であるときには『その』の使用が義務的になる。」と述べている。つまり、「ソノ+N」の「ソノ」にはテキスト的意味（先行文脈で述べた意味）を N に持ち込む機能を持っているのである。例 (10) の「その俺」の「俺」はもともと話し手自身のことであるが、「その俺」によって指示されているのは話をしている人ではなく、先行文脈で述べた「毎日死んだ人間を、何十人も見廻って歩いたり、新しいのを収容したりする」人物なのである。また、「その子供」が指示しているのは先行文脈で述べた「病気になっても医者にはかけなかったが、頑丈に育った」子供のことである。

以上で述べた「ソノ」の機能は「ソ」系列指示詞の共有の特徴だと言える。例えば、

- (11) 竹藪の近くに、木の葉や柴を積み上げて、それを燃やし、その火の中に卵を一つずつ投げ入れた。
(『斜陽』)

の「それ」と「その火」については、対応する名詞句が見当たらない。両者の指示対象は先行文脈で述べた意味を指示詞に持ち込んで始めて確定できる。「それ」というのは「木の葉や柴を積み上げて」出来上がった物を指し、「その火」というのは「それ」を燃やして出来上がった火のことを指しているのである。「その火」の用法について虎（2012）では、付随型間接照応と分類されており、「ソ」の典型的な照応用法の一つである。

「ソ」のもっと典型的な用法は以下のような「コ」に言い換えられないものである。

- (12) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その／？？この順子が今は他の男の子供を二人も生んでいる。(庵 2007：98)

例（12）の「その順子」は先行文脈に現れた「順子」という固有名詞を単純に指示しているのではなく、「『あなたなしでは生きられない』と言っていた」という属性を持っている「順子」を指示しているのである。

このように、「ソ」は照応用法において、先行文脈で述べた意味を当該事物に持ち込む機能を持っている。指示対象が具体事物でも抽象事物でもそのような性格が見られ、「ソ」の直示用法と直接な関連がないと言えよう。

5 対訳率と指示詞本質との関係

3と4の考察を通して、照応用法において、“这”と「ソ」の無標はもともと本質が異なるということが分かる。“这”の照応用法は直示用法の拡張であり、“这”の無標は「指示システムの自己中心原理」という認知的原理を表し、特に距離感や心理的疎遠を持たない照応の場合、“这”の使用が義務的である。それに対し、「ソ」の照応用法は直示の拡張ではなく、「ソ」の無標はテキストの結束性における「ソ」の機能の発達を意味しているのである。

“这”と「ソ」の照応用法における本質的な違いは中日指示詞の対訳率を予測かつ解釈することができると考えられる。表5は照応の「ソ」と“这”がそれぞれ翻訳される状況を示している。照応表現の多様性もあり、指示詞に訳されず、他の照応表現（人称代名詞やゼロ形式など）に訳される場合もあるが、それを「#」で記される。

まず、“这”の照応用法は直示の拡張であり、近称の性格を持っている。そして、「コ」の照応用法も直示的な性格を持っており、指示対象があたかも目の前にあるかのような語用的効果がある。そのため、“这”が「コ」に訳される例が多いことが予想される。表5で分かるように、“这”が「コ」に訳される例は626あり、照応用法の52.3%を占めており、半数を超えている。

表5 「ソ」と“这”の翻訳状況

ソ				这				
这	那	#	合計	コ	ソ	ア	#	合計
436 (28.7%)	208 (13.7%)	875 (57.6%)	1519 (100%)	626 (52.3%)	181 (15.1%)	7 (0.6%)	382 (32%)	1196 (100%)

次に、「ソ」の照応用法は他の指示詞に見られない特徴があるので、指示詞“这/那”に訳される比率はそれほど高くはないことが予測できる。表5を見て分かるように、「ソ」が指示詞に訳されない「#」は全体の57.6%で、半数以上を占めている。

最後に、“这”も「ソ」も無標なので、指示詞としてテキストの結束性における機能が発達しているため、対訳される場合は少なくないと思われる。28.7%の「ソ」は“这”に訳され、15.1%の“这”は「ソ」に訳されていることが分かる。

本文では“这”と「ソ」の無標の違いについて分析するのが目的なので、それぞれの翻訳状況を簡単に挙げたのにとどまる。中日指示詞の用法をまとめて分析するには、他の指示詞の翻訳状況にも注目すべきである。

6 おわりに

“这”と「ソ」の無標について、コーパスのデータと用例を考察した結果、両者の性格が本質的に異なることが分かった。まとめていうと、“这”の照応用法における無標は直示用法の拡張であり、「指示システムの自己中心原理」という認知的原理を表し、特に距離感や心理的疎遠を持たない場合は、“这”の使用が義務的である。それに対し、「ソ」の無標は直示と関係なく、照応用法は「ソ」の本質的な用法である。照応の「ソ」は先行文脈で述べた意味を指示対象に持ち込む機能を持っている。本文の分析は“这”と「ソ」の翻訳状況からも裏付けられるのである。

1で述べた「コ」の誤用について、中国人日本語学習者が「ソ」を使用すべきところに「コ」を使用したのは、指示対象を「われわれ」の領域内のものとして捉えるからではなく、このような場合、中国語では無標の“这”の使用が黙認されるからである。母語の転移により、日本語の指示詞の中で、近称の「コ」を選んで使用したわけである。このような誤用から、日本語教育の過程では、「ソ」の無標があまり言及されていないことも窺える。

言語の対照研究を行う際に、言語間の特殊性だけでなく、普遍性も重視しなければならない。これは外国語教育についても言えるが、特殊性と普遍性を合わせて説明した上で、より良い教学效果が見られると思われる。

例文出典

杨沫《青春之歌》
史铁生《插队的故事》
王蒙《活动变人形》
井伏鱒二『黒い雨』
大江健三郎『死者の奢り』
太宰治『斜陽』

参考文献

1. 庵功雄, 『日本語におけるテキストの結束性の研究』, くろしお出版 (2007).
2. 木村英樹, 「中国語指示詞の『遠近』対立について: 『コソア』との対照を兼ねて」, 大河内康憲 (編),

- 『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』，くろしお出版，181-211（1992）.
3. 金水敏，「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」，自然言語処理，(7)，67-91（1999）.
 4. 胡俊，「文脈指示における日本語と中国語の指示詞についての対照研究——論説文の場合——」，日本鹿児島大学：地域政策科学研究，7，127-138（2010）.
 5. 迫田久美子，「指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程——対話調査による縦断的研究に基づいて——」，日本語教育，89(08)，64-75（1996）.
 6. 迫田久美子，「中国語話者における指示詞コ・ソ・アの言語転移」，広島大学日本語教育学科紀要，(7)，63-72（1997）.
 7. 史雋，「文脈における日中指示詞の対照研究」，一橋大学留学生センター紀要，(11)，65-77（2008）.
 8. 単娜，「日中両言語におけるダイクシス指示表現の比較対照——認知言語学的な観点による一考察——」，東京成徳大学研究紀要，(18)，123-133（2011）.
 9. 馬場俊臣，『日本語の文連接表現——指示・接続・反復——』，おうふう（2006）.
 10. 吉本啓，「日本語の指示詞コソアの体系」，1986，金水敏・田窪行則（編），『日本語研究資料集第1期第7巻 指示詞』，ひつじ書房（1992）.
 11. 曹秀玲，“汉语‘这/那’不对称性的语篇考察”，汉语学习，(4)，7-11（2000）.
 12. 庞黔林，“汉日指示词间接回指的对比研究”，外语研究，(6)，35-40（2012）.
 13. 沈家煊，《不对称和标记论》，江西教育出版社（1999）.
 14. 《中日対訳コーパス》，北京日本学研究中心（2003）.

（原稿受理日 2022年2月5日）